

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | マンダリンのボタン <一般> |
| Author(s) | カラガーツィス, ; 岡野, 純 |
| Citation | 広大言語 , 6 : 46 - 52 |
| Issue Date | 1966-12-10 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046245 |
| Right | |
| Relation | |



マンダリンのボタン

カラガーツイス
尚野 純 訳

彼はアテネの第K D税務署の一番陽の当らない部屋に閉じ込められている、小さな色つきの悪い税務吏であった。その部屋で、いろんな色の紙と部厚い会計簿に埋もれながら、それぞれの徴税法規に照して他人の貧富に税を課しつつ、正直に自分の貧しい生計を営んでいたのである。

最初、彼の上役の税務官は、彼を骨の折れない簿記係に役づけた。が、ある美しい日に総合税課の監査係に配置変えたのである。

その日から、彼は心の静謐を失った。その時から、彼のおとらしい気質はくずれた。富とその至福な結果とが、毎日、昼間の八時間、彼のくらくらする眼の前を通りすぎた。『夏はヨーロッパへ小旅行、冬は自家用ヨットでエジプトへ。自動車三台（パッカード、メルセデス、ビュイック）、コロナーキ〔註。アテネの地区の名、リカヴェイトス山の南〕に邸宅、ブンヒコン〔註。アテネの富豪街〕に別荘、そしてスニオンに猟小屋。月曜日に三十人のレセプション、月に一度、百人、年に一度（謝肉祭）三百人……召使の人数十三。極秘情報、豪華な密会室を二室所有、大きい方は社交界の婦人のため、小さい方は商売女のため……』。

俸給が税込みで漸く二千八百五十ドラフマだというのに、一日中そういった『書類』を読むのは恐ろしいことだ……。乾燥した事実が彼の飢えた眼の前ではっきりした形をとる。ヨットは真白な色で異国の港へ航海して行く。三台の自動車は野や山を走り廻る。謝肉祭のレセプションは目もさめるばかり。二つの密会室となると……二つの密会室は……ここで彼の頭脳は停止してしまった。

彼は被課税者に対していささか厳格になり始めた。異議申請書が廻ってくると、まず欄外に赤鉛筆で『不受理』と書き入れ、怒った身振りで机の端へ押しやった……。生のすべての表明、喜びや享樂は彼にとって不受理であったのである……。ヨットや自動車や二つの密会室を持っている者が税務官の決定に異議申請をすることは許されないのだ！ それは不受理だ！ 不・受・理だ！ そして落着かない身振りで赤鉛筆の尖をとがらせた、まるで宇宙がその造物主に出した課税減免の異議申請は彼が受けとらない限りは不受理であることを、空の青い紙に東から西へ大文字で書こうとするかのようだ。

自分の乾いたパンに自分でバターを塗ろうと思えば、できなくはない立場であった。だが彼は正

直だった。心の中に正直の虫を持っているので正直だといったたぐいの人間の一人であって、警官や検察官を恐れての正直ではなかった。夕方、友人のバヴラーキス・ヨアネーシス（彼の俸給の倍ほども金を使い、保険会社の社員であるが）とピケート〔トランプ遊びの一種〕をするために、コーヒー店『オレア・アンフィロヒア』に行ったら、一緒に長い哲学談義をやり、そこで議論に火花が散り、とどのつまり意見は一致しなかった。

「おかしいぜ、バヴラーキス、どうもおかしいぜ……僕の言わんとすることはだ……つまり君は君のかなりな俸給を不法にもらいすぎている……不法にだ……そんなことは！ 不受理だぞ」

「何て言ったらいいかなあ、ジミトラキス君、人生は短い、われわれはそれを楽しまなくっちゃ。会社が僕によこす三千二百ドラフマ、それに特別手当を合わせて僕が使える六千五百ドラフマが僕にとってどれほどの役に立とう？ 今どき女の子をもっていると——われわれは若いんだ——お金がかかる。つまり映画だとかタクシーだとか（われわれは人間であって犬ではないんだ）。それから贈り物のストッキング。支配人が僕の俸給を三千二百ドラフマに決めた時、何に使うかと訊いたよ……」

「きみの妻い用を、きみの経済状態に合わせて調節したまえ、でないときみに倍額の附加税を課するぞ」

しかしバヴラーキス・ヨアネーシスはいつも最後の短兵急な論法をもっていた。

「若しもだ、ジミトラキス君、君がここにあるこのボタンを踏むや否や、シナで一人のマンドリンが死ぬ、そして君は彼を殺したということを知らされないまま、彼の全財産を相続することになる、とこう言われたら、君はどうする？ ボタンを踏むかい？」

ジミトラキスはいきり立った。

「決して。決して。正直とは詭弁的な三百代言を受け入れない完璧な精神なんだ。正直者は自分の良心に対して責任をもつ、そして他人の意見にはただ無関心だ」

そして、以上の言葉を述べた時、彼が余りにも立派だったので、バヴラーキスは憐憫と同情の身振りをした。

ある朝二千八百万ドラフマの相続人の異議申請書に、ぶりぶりして『不受理』と書き込んだ時、受付係が、彼に電話がかかっていると告げた。

電話だって？ これはまた何の厄介ごとだろう？ 才KD 税務署で動いて今で十五年になるが、かつて誰も彼を電話によび出した者はなかった。そこで彼はむっつりした顔で受話器をとりあげ、気の進まない、かさかさした声で『モシモシ』と言った。

「ジミトラキスだね？」

「ええ、私です。どなたです？」

「アナスタシス・パドブロスだ。覚えていないかい？ 君の古い同級生だよ！」

「ああ、アナスタシスか？ どうして、覚えていないどころか！ て、君はなぜ僕を思い出したんだ？」

「君の古い手紙を見つけ出したんだ……旧友よ、話をするために君に会わねえならんのさ。久しぶりだ！ なあ、一緒に食事をしよう。夕方、『メガリ・ウレタニア』に来たまえ」

冷汗がジミトラキスをつつんだ。

「僕は、『メガリ・ウレタニア』では食べない」

「あの料理人がいやなら、『キング・ジョージ』で食べよう」

「僕は『キング・ジョージ』には行かない」

「相変わらず気むずかしいんだな、ジミトラキス。……なるほど、変わってないよ！ いいかい、九時にルンビエで落合おう……」

「僕はルンビエへ行かんよ！」

「要するに、どこで会いたいんだい」

「スフィカキスのピアホールでさ……」

「君の言う通りに。じゃ、九時にね！」

✱

ジミトラキスは、クリスマスや復活祭にはいつも、気晴しをしようと心に決めた時には、スフィカキスのピアホールで食事をした。彼はそのガラス戸の前を通る時、いつもちょっと怖気を感じた。かくて今夜も、テーブルに着いてビールを注文し、それを楽しむというでもなくちびちび啜った。まわりはいつもになくきらびやかで、彼を苛立たせた。

九時十五分にアナスタシス・パドブロスがやって来た。黒いレブブリカ〔帽子の一種〕を被り、とてもスマートだ。

「やあ、いとしい友よ」

「やあ、親しい友よ」

ぎゅっと固い握手。

「会いたかったよ、ジミトラキス君！」

「僕もだ、タソス君！」

タソスは腕時計を見た。

「九時二十分だ。食事に行こう！」

ジミトラキスは固くなった。

「どこへ？ ここじゃいけないのかい？」

「うん、君！ 僕の連れて行くところへ来るんだ。反対はできんぞ！ 前へ、進め！」

ドアの前に五メートルもある一台の大きな黄色い自動車が待っていた。

「入り給え、ジミトラキス君」

「君の車かい？」

「僕のだ」

「型は？」

「クライスラーだ」

「なるほど、君はすばらしく金持ちなんだなあ！ 打ち勝ち難い証拠だ！ 年収四十万ドラフ
ッ！ 異議申請はすべて不受理！」

タソスは笑った。

「入り給え。さあ……ああ！ ブラー夫人を紹介しよう……」

ブラー夫人は、片脚をもう一方の脚に載せて、クライスラーの皮の坐席に身体を伸していた。
そしてその二つの脚は、二つの脚は、二つの脚は……

「不承……」とジミトラキスは呟いた。

しかし彼はひどくおそれをなして、深紅の唇と真白い歯でほほ笑みかけるブラー夫人の傍に身を屈めて腰を下ろした。タソスが操縦席に坐り、幾つかのボタンを踏むと、車は静かにアスファルトの上に滑り出た。そしてジミトラキスは、あの中でどれが一体マンダリンのボタンだろうかと何度も自問してみた。そのことに利害があったからではなくて、あらゆる可能性に対する興味のためである。

✽

朝の二時頃、彼らは『アルゼンティナ』に辿りついた。給仕たちはお追従笑いをしてパパドブ
ロスを迎えた。三人は狭いボックスに腰を下ろした（とても狭く、ブラー夫人の片脚が、ほかに
もって行く場所がないので、ジミトラキスの膝に柔らかく約束ありげに寄りかかった）、そして
いろいろの神秘的なアルコール飲料や沢山のソーダ水を注文した。それというのも、グランド・

ブレタニで味ったアメリカ風のえび料理、山鷗、シルカナベ、シャトブリアン・オ・ボム・ドゥ・テール〔料理の一種〕、そのほかフランス葡萄酒のシャトブリヤシャト・イクムにたっぷり漬けたいろいろの珍しいおいしいものをこなすためであった。

ジミトラキスは、胃に心地よい暖かみを感じ、それは心臓、頭、手足全体、感覚全体に溢れて行った。ブラー夫人の脚はと言えば、それはひやっこく、しっとりしていて、もう一つの焼けるように熱い流れに対して、つめたい反作用をおよぼした。

「これは何だい？」とジミトラキスは、哲学的な眼でチェコスロヴァキアのバレエの動きを見ながら、コーヒー飲料の入ったコップを下に置いて言った。

「ウイスキーよ」とブラー夫人は唇をほほ笑ませながら答えた。

「これウイスキーですか？ ものすごく税金がかかりますよ。そしてこちらにあるこれは？」

「ジン入りのカクテルよ」

「カクテルを飲む者には、総合課税の推定の下に、調整をする、は・は・は」

彼は笑い興じた。人生が大変美しくなり始め、金というものが魅力を持つてゐることを理解した。税務吏たちは、なぜ、まるで罰せんがために富を追跡するのだろうか？ しかし富、すなわち享樂のためのその浪費は、国家的な意志表示で報わらるべき文明の徴候である。きびしい抑圧的課税の徴候ではないのだ。課税体系は一切、どこかで疎く。……そうだ……疎く……今やどうやらそれがわかった……自分の新しい考えを公式に表明するために、然るべき筋を通して、大臣に意見書を出そう。富は罪悪ではなくして……

あとのつづきは彼の酔った頭の中で混沌となった。そしてブラー夫人は彼の上に全身よりかかって来た。

「タソスよ！」と彼は一瞬大袈裟な言い方で叫んだ。「僕を思い出してくれて何ていいやつだ！ 流石は友だちだ！」

タソスはほほ笑んだ。

「会いたかったよ、ジミトラキス。で、どうして君をこう思い出したかわかるかい？ 僕は君の税務署で用件があるんだ、非常に重大な用件がね。僕は困っていたのだ。そしてふと思い出したんだ。『だが、ジミトラキスがオDR税務署にいる』とね」

ジミトラキスが？ ジミトラキスは不意に目まいから解放され、そして彼の痔がサディズムを以て彼を苦しめた。そうするとこれが友情であったのか、関心その他であったのか？ そのため彼に饗応をし、酒を飲ませ、ブラー夫人に命じてテーブルの下で彼の足を押えさせたというわけか。不受理だ。絶対に不受……

しかし彼の反撥は当座のものであり、皮相的なものであった。反撥というものは否定的なものである。ところがブラー夫人は彼女の肯定的な姿において肯定物である。

「君が用件があると言ったのはどの税務署だったっけ？」

「オDKだよ、君の税務署でだよ！」

大きな笑いが心の中で彼をゆさぶった。しかし表情は何も見せなかった。話は喜劇的になった！ 『親愛な』タソスは、ジミトラキスが実際にはオKD税務署の吏員であるのに、オDKの吏員だと思って、ひどい目に遇ったわけだ。一言、本当のことを言うほかなかった。『最も愛すべき旧友』のタソスと美しいブラー夫人の作るであろういやな顔を見るためには。一言で充分なのだ。一言で。

しかしその一言を彼は言わなかった。ウィスキーは、はなはだ刺激的だった。カクテルは驚異だった。ジャズはアメリカ調をむせび奏でた。踊り子たちはヒンドウスタニーぶりをゆっくりと舞った。そしてブラー夫人の微笑には彼の心にふれるものがあった。そうしたあとで、タソスがそんなひどい誤りに落ちたとしても、彼は何の悪いことをしたことになるのか？ 金を貰ったのでもない、買収されたのでもない、何でもない、彼はオDK税務署の仕事の『担当官』ではなかったのだから。彼はいかかわしい享樂の冒険の中から、正直のまま、始めと同じ、いつもと同じ極度の正直のまま出て来ようとしていたのだ。

正直のまま？ そうだ……恐らく……務めに対して……彼の公務員の良心に対して……いや、彼自身、つまりジミトラキス・パルツィネヴェロスに対して、すなわちマンダリンのボタンを踏むことを恐怖を以て拒否する百パーセント有徳な非妥協的哲人に対して恥じないままで。

「おどりましょう」とブラー夫人は甘い口調で申出た。

彼は彼女の腰を捕まえ、二人はリズムカルに踊りながらダンス場へ流れ出た。

※

ほの白い明け方。タソスは彼とブラー夫人とをある大邸宅の入口に残し、ガス燈をつけ、シニカルに、そしてみごとに立ち去った。ブラー夫人は彼の手をとり、そして彼を——運命に服従した思慮のないほろのような男を——エレベーターの中に押し込んだ。

彼女はドアを閉めて彼の傍にすりよった。暑かった。

「ジミトラキスさん」と彼女は言った。「わたしレティロ（私室）にいますの」

「ああ、つまり？」

「横に『くぼみ』と書いてあるボタンを押して頂戴」

エレベーターはがたがた揺れた。そしてすべるようにくぼみの前まで昇って行った。そこには、それまで有徳であった一人の税務吏員の運命と夢の才七天国があったのだ。そしてジミトラキスは押しているボタンから指を引く勇気を持たなかった。

『今夜、シナでは何人のマンダリンが死ぬのかな？』と彼はくり返し自問した。
だがブラー夫人の赤い唇が彼の口を封鎖した。

— 終 —

カラガーティスについて

現代ギリシアの代表的な散文作家の一人であるカラガーティス (M. Karagatsis——本名はジミトリス・ロドプロス) は 1908年アテネに生まれ、法律と政治学とを学んだ。しかし弁護士や政治学者としての経歴をふまず、文学者として名をなした。1929年に短篇小説「ニーツァ夫人」で文学界に登場、そのあと、長篇小説「リャブキン大佐」(1933)を発表、つづいて「ユンケルマン」その他数々の短篇、長篇の小説を書いた。多作家であったが、1960年に没した。

カラガーティスの作品には、人間の不健康な面との対決をテーマとしたものが多く、ペシミズムとフロイディズムがその思想の底を流れている。話の発端、運び、結びといった小説技法における物語り作者としてのすぐれた才能とその豊かな空想力とは、彼の作品を読んで面白いものにしており、数多い熱心な読者をもっている。

ここに訳出した「マンダリンのボタン」は短篇集「雨の水」(1950)の中の一編である。かならずしもすぐれた作とは言えないかもしれないが、しかしこれによってカラガーティスの作風のおよそは窺うことができるであろう。(J.O.)

五郎やんとかわつば 長崎県民話 (その3)

横 山 悌 志

おじじ、今夜もまたなんかおもしろか話ばきかせんな。ううんよしよし、そいでんおまいのと話のしいた子はめずらしいかばい。そぎゃん云うぎと、今夜はなんの話ばしゅうかにかや。そうそう、こにゃあだ(このあいだ)のがわつばの話の続きばしてきかしゅうらだい。